

「初めての中国」

3-A 明海大学 板垣凜

今回初めて北京へ訪れ、中国の歴史や文化に直接触れることができました。訪中団で得られた経験や気づきは、私の中の「中国」のイメージを大きく変えさせてくれた貴重な学びとなりました。まず現地に到着すると、インターネット上での情報の他、実際に自分の目で見た中国の規模の大きさに圧倒されました。空港を出てすぐ広がる大通りや、街中に立ち並ぶ高層ビルの数々は、まさに圧巻でした。ひとつひとつの建物や施設がとても大きく、道幅も広く取られており、都市全体の規模の大きさに驚かされました。北京の街は想像以上に賑やかでどこへ行っても多くの人が溢れていました。特に繁華街では地元の人と観光客が入り交じり、活気に満ちた雰囲気です。現地の食事や交通を通して、日常生活における現代的な側面にも触れることができました。北京ダックや火鍋、四川料理など、本格的な中国料理を味わうことができました。7日間、豪華な中華料理をお腹いっぱい食べることができて幸せでした。街中では多くの人が電動自動車を利用しており、多くの店や屋台がスマホひとつで支払いができるなど、キャッシュレス決済の進展を肌で感じることができました。次に、中国の交通の激しさに驚きました。日本の交通に比べると、運転マナーがやや荒く感じる場面もあり、初めて見る交通風景に少し戸惑いました。しかし、クラクションの音が絶えず響いている中でも現地の人々は慣れた様子で歩いたり、運転したりしており、これが日常だという文化の違いを実感しました。そして、歴史や文化を感じられる施設にも多く足を運びました。廊坊師範学院や中国共産党歴史展示館では、展示のこだわりや充実した内容から中国の奥深い歴史や文化に触れることができ、学びの多い時間となりました。最終日には、世界遺産である、天壇公園へ訪れました。日本とはまた違う歴史ある中国建築を直近で見ることができました。特に印象深かったのは、北京外国語大学を訪問し、現地の大学生と交流したことです。将来の夢について語り合い、最後に全体の前でトーク内容の発表をしました。中国語や日本語を交えてコミュニケーションを取る中で、語学の難しさと同時に楽しさも実感することができました。短い時間でしたが、現地の大学生と交流できる貴重な経験をさせていただきました。さらに、北京大学で開催された世界青年和平大会にも参加しました。会場には、世界各国から総勢3000名もの青年が集まっていました。平和を祈念したスピーチの後は、世界各地の文化のパフォーマンスを披露する時間があり、会場が一体となって盛り上がっていました。私が特に印象に残ったのは、カンフーのパフォーマンスです。力強さとアクロバティックな動き、一糸乱れぬチームの連携には思わず息をのみました。中国武術の奥深い歴史や精神性が込められており、伝統文化の体現であることを強く感じました。演者たちの真剣な眼差しや技の繰り出す姿に心を打たれ、文化の重みや美しさを実感しました。中国文化の一側面として、カンフーの魅力を体全体に感じ取ることができました。最後に、今回の訪中を通して、私は中国という国に対する関心が一層高まりました。文化や考え方の違いに触れながら、自分の視野を広げる貴重な経験

となりました。このような経験をさせてくれた訪中国に関わってくれた全ての方々に感謝を忘れずに、今後も中国に足を運び、実際に自分の目で見た中国の良さを周りに伝えることで日中友好の架け橋となる存在になりたいと考えています。

「街の記憶は人の記憶」

3・A 東京大学 海老澤茉由莉

「僕は去年も今年も中国に行ったけど、中国は日々変化している。行かないと本当の中国はわからない。日本にいと、その変化がほとんど伝わってこないんだよ。」

ある日、中国留学を控える友人が私に投げかけた言葉は私の好奇心を引き出した。書籍や映像、料理を通じて中国に関する知識は蓄積していた。だが、すべて現地で体験したことはない。自分の目で変わりつつある中国を見たいという思いがあふれた。私はその晩、ネット検索で訪中国のホームページに辿り着き、応募の準備を進めた。

中国出発当日。前の晩、なかなか眠れなかった私はへろへろの体で空港に向かった。空港では100人の学生がお互いを探り合うように会話をしている、居心地が悪かった。

せっかく待ちに待った訪中国、楽しめるだろうかと私は不安でいっぱいだった。

そんな不安も杞憂に終わる。2025年7月24日から30日の7日間、次から次へと現れる中国のリアルを受け止めるのに必死だった。

中国廊坊市までの10時間以上の移動で、私は2つの映画と1冊の本を読み、たくさん寝ただけだったが、何も喋れなくなってしまうぐらい疲労していた。

しかしホテルに到着して驚愕した。想像以上に豪華なホテルと広い室内。期待感が高まった私の疲れはいくらか軽減した。廊坊市から出発して北京市に向かう際、バスガイドの方にVIP待遇を受けていたことを教えてもらった。私たちが行く先々で私服警官の方が常に警備に当たってくださったり、バスの前と後ろに廊坊市から派遣された車がついていたこと、止まらず移動できるよう信号まで調節されていたこと。全く気づかなかった廊坊市の気遣いにジンとした。私たちが歓迎されているということを行動で示してくださった廊坊市に、私は何を還元できるだろうかとバスの窓から外を眺めて思いをめぐらせた。

6日間にわたって様々な場所を訪れ、幅広い体験をしたが、特に印象に残っているのは中国共産党歴史展示館、北京外国語大学、トイレ、中国料理、そして活気ある人だ。

まず共産党歴史展示館。どんなふう to 中国政府が自国および共産党の歴史を掲示しているのか、私は気になっていた。展示館は私の予想を超える規模感と展示方法だった。共産党の歴史において大事なシーンが登場人物の模型とともにダイナミックに展示されていた。ライティングや小道具も工夫されていた。また、発展し続ける中国を体感できるアトラクションまであった。ここまで国民感情を高揚させる仕掛けがある展示館があるとはすごいなど、ただただ圧倒されていた。

そして北京外国語大学。流暢で綺麗な発音の日本語を話し、グループメンバーに面白い冗談を話して団員を笑わせたかと思えば、中国のリアルについても真剣な表情で語ってくれるチョウさんの姿が印象的だった。団員と外語大の学生同士で将来の夢を共有した。団員はいつか叶えられたらと願う実現可能性の低い夢もあげていたのに対し、外語大生は安定した生活や大学院への進学など近い将来の目標を話していた。外語大の学生は競争率の非常に高い受験戦争を生き抜いて大学で学んでいる。いい大学に入っても、いい就職先につけるかはわからない。今後の人生に対する漠然とした不安を一つずつ潰そうと努力し続ける中国の学生の志の高さを突きつけられ、自分の甘えを痛感させられたような気がする。小さなカルチャーショックを受けた大切な機会だった。

次にトイレ。私にとって一番大きなカルチャーショックだ。ちょうど先月香港にも訪れたので心の準備はできていたはずだった。しかし7日間にわたって和式便所を耐え凌ぐことは、大きなストレスだった。訪れた施設は豪華絢爛で先進的なのに、トイレが80年代仕様というぐさにはぐさに私は最後まで慣れなかった。新しいスポットに到着するたび、トイレをすでに使用した友人に「このトイレは10点中何点?」「洋式?和式?」「匂いは?」「床のタイルの色は?」と質問攻めするほどだった。今後いろんな国や地域を取材したいという思いがある私にとって、トイレに神経質なのは直すべきことだろう。私の精神を、中国のトイレは鍛え直してくれた。そして、日本人にとっての「トイレ」と中国人にとっての「トイレ」は全く違うのだらうと、国ごとの認識の差を考えるきっかけにもなった。

最後は、活気のある人。スケジュールの都合上、私は街の人と触れ合う機会は少なかった。だが、バスの窓から外を覗いたり、少ない自由時間で周囲を見渡したりすると、中国の日常生活や人々の関係性を垣間見ることができた。道路にはレンタル自転車を漕ぐ人が連なり、一台の自転車にお母さんだけでなく、小さな赤ちゃんと不貞腐れた顔の男の子が前後に乗っている。AlipayのQRコードを首から下げたおじさんが、盛んに道端で物を売っている。バリキャリウーマンが高級中華料理店で北京ダックを食べている。日本と一部似ているようで、街角から発散されるエネルギーの大きさや蠢く力はもっと強いと感じた。お土産を物色していたら、どこからか店員が隣に現れ、次々に商品を持ってきて説明してくれる。中国語がほとんど話せない私に、身振り手振りで情熱的に伝えてくれる。添乗員や運転手も皆優しく、私がぼーっと立っていても話しかけてくれ、さまざまなことを教えてくれた。特に3号車のバスガイド、範さんが印象的だ。団員が疲れて寝始めた車内でも、大きく揺れる中、常に笑顔で立ち続け、面白い話を7日間語ってくれた。印象に残っているのは、中国の自転車レンタルサービスの話だ。導入当初は数十社が参入し、色とりどりの自転車が並んだが、各社がサービスや特典を競い合った結果、現在は3社3色に淘汰された。14億の人口、14億の脳、14億の消費者が生きる中国では、日々さまざまな

発想が生まれ、実行され、淘汰される。大きな龍が蠢き続ける中国の今後は見逃せない
と、人々と触れ合って実感した。

帰国翌日、訪中団参加の契機をくれた友人に「中国はなんだかいい国だ。人が優しい」と
感謝のラインを送った。

「中国がいいところだとのこと、よかったです。街の記憶は人の記憶とはよく言ったもの
で、それを聞いて僕も留学への不安が少し減りました。」

街の記憶は人の記憶、その通りだ。

「積極的態度」

3-A 法政大学 大窪佑柊

まず、今回の訪中団で日本の代表として中国に派遣されたうち、もっとも大きな学びは自分の多文化共生の価値観をより深いところにアップデートできたことです。私はゼミナールにおいて、多文化共生・異文化理解を主軸として卒業論文の研究を行っています。そのため、ある程度の多文化共生に関する知識は把握しており、自分も色眼鏡を外して物事を捉えることができているつもりでいました。しかし、訪中初日からその考えは見事にひっくり返されました。私は中国に対して色眼鏡を外したと思っていたながらも、まだまだ外せたとはいえる状態になかったのです。初日に中国のホテルに着いた際、私は広い構造のため少し迷ってしまったなかで、宿泊している中国人と出会いました。その方は言語の壁もありながら、必死に翻訳機を通して私を助けようとしてくださり、最終的にはホテルの施設の説明まで詳しくしてもらいました。元々家族を大事にするということは知っていましたが、見知らぬ言語も通じない相手にもここまで優しい中国人がいるのかと、まず初日に感銘を受けたと同時に、中国人を「抽出された一部の例で全体」として語っていた自分に気づかされました。さらにその後の訪中期間では、なぜ日本で中国人が毛嫌いされがちなのかについて、国民性というよりも文化の擦れなのだと発見できました。驚いたのですが、中国の方は人前で平然とおならをしたり、一部のトイレも互いが見える状態でしていました。日中ハーフの友達に気になって連絡すると、「中国は良くも悪くも他人を気にしない。一瞬注目は浴びるかもしれないけど、すぐ元通りになるから。」と返信が来ました。これを踏まえると日本で中国が毛嫌いされがちなのは、たまたま日本が他人をよく気にする文化で、中国が他人をそこまで気にしない文化だったことで摩擦が起きているというのが原因なのかもしれないと考えました。これをその人の道德観・国民性へと帰責するのは、日本として考え直さなければならない点だと思います。

総括して、多文化共生には自身が思っている以上に積極的態度で情報収集、対話を重ねる必要があると分かりました。現地に飛び込んで、人と話して、疑問を持って、理解するという実践的なプロセスを踏まずに他の文化や人間性を語ることはリスペクトに欠けると、胸に刻みたいと思います。また、世界青年和平大会に参加してみて、改めて将来の自分はこういった世界レベルで活躍したいと思いました。自分が日本で暮らしているうちにも、まだまだ世界のどこかには会ったことのない国の人と同じ時間を過ごしていると思うと、極めて不思議な感覚を覚えたのと共に、来年からはメーカーとしてこういった世界の人々の生活に向けて商品をつくっていくのだとワクワクしました。グローバル人材として活躍するためには相手のことを知ることがまず大切ですが、今回の訪中で学んだ積極的態度で相手の理解に努め、一方通行のマーケティングではなく相手ベースのマーケティングを打ち出していきたいと思います。この度は貴重な機会をありがとうございました。

「国際人としての語学」

3-A 東京外国語大学 鬼塚 泰祐

今回の訪中を通じて、私は語学を学ぶことの意味について改めて深く考えさせられた。北京外国語大学の学生との交流では、同じように外国語を学ぶ者として、私たちは「将来は国内にとどまらず、グローバルに活躍したい」という思いを共有した。共通の趣味である「筋トレ」をきっかけに会話が弾み、互いに夢や将来について語り合うことができたのは、非常に貴重な経験だった。

特に印象的だったのは、彼らが非常に流暢な日本語を用いて、自分の将来像を具体的に描き、そこに至るための道筋を冷静に語っていたことだ。それに対し、日本の大学生である私たちの語る夢は、やや漠然とした印象を持たれていたかもしれない。中国の学生たちは、自らの目標を明確にし、それに必要な語学力や専門知識を逆算して身につけようとしていた。そうした姿勢は、彼らの語学力の高さとともに、将来に対する現実的な視野の広さを物語っていた。

また、彼らの話す日本語には単なる「上手さ」以上のものがあつた。そこには「中国人として日本語を使って何を語るか」という視点が確かに存在し、自国の文化や歴史に対する誇りが滲み出ていた。自分の価値観や背景を意識しながら外国語を使いこなすことは、単に「通じる」だけの語学力とは異なる、より高度な能力である。言語を通して自分自身や自国を相手に伝えるという姿勢は、語学学習の最終的な目標であり、我々が見習うべき姿だった。

この点については、私自身が大学で語学を学ぶ中でも感じていたことである。外国語を話せる日本人は、しばしば「海外に詳しい」と見なされがちだが、実際にはそれ以上に「日本のことをよく知っている人」であるべきである。外国語での会話では、日本について質問される機会が多く、そのたびに自分の国について語る訓練が求められる。したがって、語学を学ぶとは、自国の文化や歴史、価値観を深く理解し、それを他者に伝える力を養うことでもある。

加えて、言語は異文化理解の手段であると同時に、平和を築くための重要な道具でもある。言葉を学ぶということは、その背景にある人々の価値観や歴史を知り、違いを受け入れ、多様性を理解することである。第二次世界大戦終戦から 80 年となる今日において、「異なる背景や言語を持つ相手とどう向き合うか」は常に意識すべき課題であり、語学教育にはそのような視点も不可欠であると感じる。

今回の訪中を通して、自分がどれだけ日本について語れるのか、改めて省みる機会ともなった。北京外大の学生たちが、私たち以上に「日本力」を備えていたようにも感じた。彼らは日本語を学ぶ動機として、日本のカルチャーの魅力を熱心に語ってくれた。語学の習得を通じて相手国の文化を尊重し、交流を深める彼らの姿勢は、まさに「言語を使った平和的なつながり」の実践だったといえる。

今後、私自身も語学を学ぶ者として、「中国語や英語が話せるようになる」ことにとどま

らず、「それらの外国語を用いて何を語るか」を常に意識し、自国文化への理解を深めながら学習を続けていきたい。そして、言葉を通じて人と人をつなぎ、異なる価値観が共存できる社会を築く一助となるような存在を目指したいと思う。

「日中の架け橋への一步と、交流が教える視点」

3-A 岩手大学大学院 齋藤華和

私がこの訪中団に志願したのは、名前の由来から幼い頃より漠然と感じていた中国との繋がりを、より明確にしたいという思いからでした。将来はグローバルに活躍したいと願う私にとって、その第一歩として中国を自らの目を見て、肌で感じることは、何よりも重要な経験になると考えたからです。今回の貴重な機会を通じて、私は中国の圧倒的な「スケール」と、多様な仲間との「交流」から、物事を多角的に捉える視点を学ぶことができました。

まず、中国という国が持つ圧倒的な規模感にただただ圧倒されるばかりでした。大陸の広大さや人口の多さから生み出されるスケールは、日本のそれとはまったく異なり、想像をはるかに超えるものでした。特に印象的だったのは、北京や廊坊市を移動中に目にした道路と交通の様子です。今後自動車メーカーで働く私にとって、車、道路や交通インフラは特に注目の対象でした。日本であれば片側一車線が一般的な道も中国では常に数車線が整備されており、その広さは日本の高速道路以上でした。これは、土地を広く使うことができる大陸ならではの強みであり、同時に国の力強さを象徴しているように感じられました。

また、社会主義という政治形態が街並みに与える影響も、今回の旅で初めて深く考えるきっかけとなりました。北京と廊坊市の移動中に、私はほとんど戸建て住宅を目にすることがありませんでした。これは、中国が社会主義国家であり、土地はすべて国家が所有するという特有の制度に起因していると学びました。個人や企業は土地そのものを所有することはできず、代わりに住宅用地は最長 70 年間の土地使用权を取得する形式です。この土地制度が、都市の外観や人々の住まい方にこれほどまでに大きな影響を与えているという事実は、政治というものが、人々の生活の最も身近な部分にまで深く関わっていることを、改めて実感させてくれました。

さらに、今回の訪中団は計 100 人となる大規模なもので、これも私にとって非常に大きな学びの機会となりました。7 日間の活動を通じて、多くの学生と日中友好について語ることができました。私は情報工学を専攻していますが、周りの学生の多くは文系専攻でした。そのため、同じ中国の景色を見ても、私には気づけない歴史的背景や社会的な視点、言語学的な意見を聞くことができ、非常に新鮮で有意義な時間でした。自分とは異なる専門分野を持つ学生の意見を聞くことで、一つの事象を多角的に捉えることができるようになり、自身の視野が大きく広がったと感じています。また、学年や出身大学といった枠を超えて、皆が対等に意見を交わせたことも、深い議論と交流を可能にしてくれた大きな要因でした。このような環境で築かれた友人との関係は、今後も大切にしていきたい、かけがえのない財産です。

最後に、今回の旅程にはもともと広州への訪問が含まれていましたが、台風と豪雨による大規模な自然災害のため、訪問が中止となりました。また、北京でも豪雨被害がありました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

今回の貴重な経験は、日中友好協会ならびに温かく私たちを迎え入れてくださった中日友好協会の皆様、そして現地の関係者の方々のご尽力なしには決して実現し得ませんでした。皆様の多大なるご支援とご配慮に、心より感謝申し上げます。

この訪中で得た学びと出会いを胸に、今後もグローバルな視点を磨き続け、いつか中国と日本、そして世界を繋ぐ架け橋となれるよう、日々精進していくことを誓います。本当にありがとうございました。

「訪中を通じて学んだ日中の歴史と未来」

3-A 武蔵野大学 佐々木華彩

このたび、日中友好協会を通じて大学生としての報酬に参加し、7日間にわたり中国・北京を訪問する機会をいただきました。私にとっては初めての中国ということもあり、出発前から大きな期待とワクワクした気持ちでいっぱいでした。滞在中は残念ながら天候や気候にあまり恵まれず、いくつかの予定が変更となってしまいました。本来訪れる予定だった万里の長城に行けなかったり、他の地方へ足を運ぶ計画も中止になったりと、思い描いていた通りのスケジュールにはなりませんでしたが、しかしながら、北京市内での滞在中を通じて、より深く現地の文化や社会を理解することができたように思います。中でも私が特に印象に残ったのは「中国共産党歴史展覧館」を訪れた際の体験です。展示の規模や内容、演出の迫力に圧倒されると同時に、日本でこれまで学んできた歴史と、中国側の視点から語られる歴史とでは、同じ出来事でも解釈や扱いが大きく異なるという点に強い衝撃を受けました。改めて、私たちが日頃接している歴史教育がいかに一面的なものであるかを痛感すると同時に、異なる視点を知ることの大切さ、そして近現代史についてもっと深く学ぶ必要があるという気づきを得ることができました。また、北京外国語大学を訪問し、日本語を学ぶ中国人学生たちと交流する機会もありました。日本に関心を持ち、日本語を一生懸命学んでいる彼らとの会話はとても新鮮で刺激的でした。言語や文化を通じて相互理解を深めることが、まさに日中友好の第一歩だと実感しました。私自身も今後さらに語学力を高め、より深い国際理解に貢献していきたいと強く感じました。また、都市の中で目にした中国のテクノロジーの発展には、目を見張るものがありました。街を歩いていてまず驚いたのは、電動バイクの普及率の高さです。大型のバイクではなく、小型で静音性の高い電動バイクが多く走っており、交通の在り方にも大きな変化を感じました。それに加えて、中国製の電気自動車が多く走っていることから、国家を挙げて環境対策に力を入れている様子がうかがえました。さらに、企業訪問から教育分野においてもテクノロジーが果たしている役割の大きさを感じました。都市部と地方との教育格差を是正するためのオンライン教育の取り組みや、AI技術の導入による効率化など、中国が今まさに変革期にあることを肌で感じることもできました。こうした動きを見ていると、中国は今、世界のテクノロジー分野において一歩先を進んでいるのではないかという印象を受けました。今回の訪中では北京のみの訪問となりましたが、それでも多くの発見や学びがありました。これからの機会でも、さらに他の州や地方にも足を運び、より幅広い視点から中国という国を理解していきたいと強く思っています。そして、日本と中国の関係についても、これまで以上に多角的に捉え、未来志向の友好関係を築くために自分にできることを考えていきたいです。このような貴重な体験をさせていただいた日中友好協会の皆さまに心より感謝申し上げます。今回得た学びや気づきを、今後の学生生活や将来のキャリアにしっかりと活かしていきたいと思っています。

「北京訪中団 感想文」

3-A 桜美林大学 GC 学群 4 年佐々木しずく

今回、1 週間にわたって北京を訪問する訪中団に参加させていただきました。私は体調不良のため、事前の研修会には出席できなかったこともあり、自分の班にはどんな人がいるのか、前日まで不安と期待が入り混じった気持ちでした。しかし、初日に空港へ到着した際、班のみんながフレンドリーに話しかけてくれたことで、私の緊張は一気にほぐれました。それと同時に、この訪中団での活動に対する意欲が一気に高まり、「もっといろんな大学生と交流したい!」という思いが強くなっていったのを覚えています。

実際、全国から集まった約 100 人の大学生・大学院生と密に関わる機会は、今後の人生でもなかなか得られるものではないと実感しました。この 1 週間の中で、行き先が急遽変更になったり、班のメンバーが新型コロナに感染してしまったりと、予想外の出来事もありましたが、それらを乗り越えて、毎日を充実して過ごせたのは、班のみんなの支えと、事前に計画を立ててくださった関係者の皆様のおかげです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、この訪中団で特に印象に残ったことが 3 つあります。

1 つ目は、『紅樓夢』の舞台セットの見学と、実際のステージを鑑賞したことです。建物自体がとても大きく、入る前から期待が膨らんでいましたが、中に入ると、その想像を遥かに超える壮大なセットと、美しく並べられた赤い椅子に圧倒されました。中国文化の持つスケールの大きさと美意識の高さを強く感じました。ステージでは、暗闇の中から突然現れた演者たちが美しい衣装をまとい、まるで人形のように静かに立っていたと思えば、次の瞬間には力強い演技が始まり、そのギャップに驚かされました。言葉は完全には理解できなくても、表情や動き、音楽や照明などが織りなす空間が、強い印象として心に残りました。ホテルに戻ってから、どんな物語なのかを自分で調べてみたり、さらに深く知りたいという気持ちが生まれたことも含めて、非常に意義深い時間でした。

2 つ目は、「中国共産党歴史館」の見学です。入館してすぐ、真っ赤な壁に描かれた万里の長城の壁画に目を奪われました。その壮麗なビジュアルは、歴史の重みと中国という国のアイデンティティを象徴しているように感じました。館内では、中国共産党の創立から現在に至るまでの歴史が、写真・映像・資料・実物展示など多様な方法で表現されており、視覚的にも情報的にも非常に豊かでした。特に、毛沢東や鄧小平といった歴史的指導者たちの映像や直筆の資料、当時使用されていた物品などを目の当たりにし、中国がどのように発展し、どのような思想を重んじてきたのかを具体的に学ぶことができました。解説して下さったハンさんの丁寧な説明のおかげで、ただ展示を見るだけでは得られない深い理解ができました。また、館内には体験型のアトラクションもあり、映像を使った立体的な歴史体験では、まるで時代の中に入り込んだような臨場感がありました。特に、東京ディズニーシーの「ソアリン」に似た乗り物型のアトラクションでは、中国の風景や建築が目の前に広がり、

歴史と未来が交差するような不思議な感覚を味わうことができました。歴史を学ぶということが、決して堅苦しいだけではなく、体感を通じて身近に感じられるのだと実感しました。

3つ目は、北京大学で行われた「世界青年友好交流会」の鑑賞です。会場に入った瞬間から、まるでライブコンサートのような鮮やかな演出が広がっていて、私も含め観客全員が大興奮していました。移動のバスの中では、世界各国から集まった若者たちの姿を見て、「自分は今、とても大きな国際的な場に立っているんだ」と実感し、胸が高鳴りました。各国代表の方々によるスピーチも印象的で、特に言語の壁を超えて人と繋がることの大切さを感じました。私がいっと英語や中国語を理解できていたら、彼らの言葉の深さや思いをいっと汲み取れたのに…と悔しい気持ちも芽生えました。だからこそ、帰国してからは中国語学習のモチベーションが一気に高まり、今は毎日少しずつ勉強に励んでいます。

今回の訪中国への参加は、自分の視野を大きく広げ、文化・歴史・国際交流のすべてにおいて深い学びを得る機会となりました。この1週間で感じたこと、考えたことは、これからの人生にも大きな影響を与えてくれると思います。本当にこの経験ができてよかったと、心から感じています。

「今回の訪中を終えて」

3-A 北見工業大学 篠崎アナスタシアなちあ

2025 年7 月24 日から7 月30 日の6 日間で河北省と北京を訪問させていただきました。訪中前の中国に対する印象は正直あまり良いものではありませんでした。日本のメディアで見る中国では閉鎖的また、監視されながら縛られた生活を強いられている印象を受けました。また、周囲の方達にも行くことをとても心配されていました。だからこそ自分の目で確かめたい、行きたいという思いが強くなっていきました。しかし、上記のような悪いイメージだけを持っていたというわけではありません。中国は世界的に見ても大きな影響力を持つ経済・技術大国です。また、世界的に見ても古い歴史や文化を持ち、世界四大文明の一つとしても知られています。漢字や儒教などは日本の歴史にも大きな影響を与えています。このことはニュースで月の裏側に世界初で着陸することや、高校の歴史の授業などで感じました。

まず、実際に中国に行って変化した印象について述べたいと思います。まず、閉鎖的については、イメージが大きく変化しました。なぜなら、案内してくれたガイドさんや、北京大学や北京外国語大学の学生、街で見かける中国の方々は、日本に住んでいる私達と何ら変わらない自由に生活を送っている印象を受けたからです。また、思っていたよりのんびりとしていて、おしとやか人が多かったことには驚きました。特に、河北省と北京の街並みは現在の先進的な建物と歴史を感じるお寺や住居などが共生していて、とても魅力を感じる都市でした。加えて、廊坊師範学校、宋慶齡基金会、天壇公園などを訪れて中国の伝統的な建築、文化、古典文学を体験し、とても深く豊かな歴史や伝統文化を持つ国であると改めて感じました。

次に食事についてです。今までドラマなどの画面越しでしか見たことがないような豪華な料理の数々が円卓に並び驚きました。見た目も美しく、豪華な味付けでした。大人数家族が多い中国では、円卓かつ回る中心テーブルはコミュニケーションも料理も取りやすく、自分も家で使いたいと思うほどでした。特に、北京ダックとラムのしゃぶしゃぶがとてもおいしく印象に残っています。

今回の旅で特に印象に残っていることは主に二つあります。一つ目は、廊坊師範学校です。観客が移動して劇場を見るというスタイルがとてもおもしろかったです。また、劇場外の建築がとても美しく不思議な空間でまるで夢の中にいるようでした。特に、劇のテーマだった紅樓夢に興味を持ちドラマなどで学びたいと強く思いました。二つ目は、素晴らしい仲間との出会いです。様々な学部学科、年齢、バックグラウンドを持つ学生が集まり、日常生活では関われないような人たちとたくさん交流できたことがすごく楽しかったです。自分とは違う分野の学びの話が興味深かったです。

このような素晴らしい体験をできたのは、日中友好協会の皆さま、現地で対応して頂いた中国側のスタッフと皆さま、現地の大学生の皆さま、共に旅をした日本の大学生、多くの方々の尽力により無事にすべて日程を終えることができました。皆さまのおかげです。本当にありがとうございました。

「知ること、そして感じること」

3-A 日本大学 梶本有咲

今回、訪中団として中国を訪れ、歴史・文化・産業、そして現地の人々との対話を通じて、私は、人と人との交流の大切さを改めて実感した。同時に、その国の歴史的背景や文化を尊重する姿勢が、交流の基盤として極めて重要であることにも気づかされた。

現地では、心温まる出会いがいくつもあった。スーパーマーケットで出会った店員の方が、言葉の壁を越えて積極的に話しかけてくれたこと、テレビタワーで働く私と同年代の青年が、日本語で親しげに話してくれたこと。こうした交流を通じて、国同士の関係が政治・経済の面で緊張している中にあっても、個人同士が顔を合わせ、目を見て会話をすることで通じ合えるものがあるのだと、改めて実感した。「百聞は一見にしかず」とはよく言ったもので、ニュースや統計では決して得られない温度感が、そこには確かにあった。

特に印象に残っているのが、北京外国語大学の学生たちとの交流である。

互いの将来の夢について語り合った際、北京外語大の学生たちは、「留学がしたい」「公務員になりたい」「衣食住に困らない生活がしたい」という現実的な答えが返ってきた。私は、「世界一周がしたい」というようなどちらかといえば理想的な夢を語ったが、その動機の部分で彼らと大きな違いを感じた。

それぞれの夢に対してなぜそれを叶えたいのかという話題になった時に、彼らの多くが「家族を支えるために働きたい」と話していた。自分の夢を追いかけることが当然だと考えていた私にとって、その言葉は新鮮であり、同時に深く心に残った。彼らの価値観の根底には、他者を思いやる心や家族への献身があったのだ。

この時私は、一週間三号車のガイドをしてくださったハンさんの言葉を思い出した。「中国では、田舎出身でもいい大学に入り、良い企業に就職すれば、家族全員が都会で安定した生活を送ることができる。だから中国人の学生たちは必死に勉強しているのだよ。」この言葉は、彼らの価値観の根底にあるものを理解する大きなヒントとなった。同い年の中国人学生たちと向き合い、私は素直に尊敬の念を抱いた。私はこれまで、自分の夢や進路を「自分のため」に選んできたが、彼らは「自分がどのように社会や家族に貢献できるか」を出発点に考えていた。その違いに触れたことは、私自身の価値観を見直すきっかけとなった。

また、日日交流の面でも、私にとって大きな刺激となった。普段関わることのない分野を学ぶ学生たちとの会話は新鮮であり、専門が異なるからこそ見える視点や価値観に多くの気づきを得た。

この訪中を通じて私が学んだのは、異文化交流において最も大切にすべきことは、相手の

育ってきた環境や文化、そして国としての歴史的背景を理解したうえで、先入観をもたず、自分自身の目を見て、心で感じたことを軸に向き合う姿勢であるということである。

国が異なれば、言語や習慣、価値観に違いがあるのは当然である。だからこそ、その違いを興味深くとらえ、楽しむ柔軟さが求められる。一方で、表層的な興味だけで接するのではなく、相手の文化や歴史に対する敬意を土台とすることが、真の意味での交流を成立させる鍵となる。

今後、社会に出て多様な背景を持つ人々と関わる中でも、私はこの訪中で得た学びを忘れず、相手の文化や歴史的背景に敬意を払いながら、先入観にとらわれずに実際の対話から感じ取ることを大切にしていきたい。

「日中友好の第一歩」

3-A フェリス女学院大学 鈴木理茶

今回、私は大学生訪中国に参加し、自身の肌で「中国」を感じることができた。私は現在大学三年生で日々中国語と中国の文化や日中間の政治面について勉強をしているのだが、実際に中国に訪れたことはなく、ネットを通した「中国」しか見たことがなかった。しかも流れ着いてくる中国に関連した情報や動画等はどれも批判的で日中友好とは真反対に値する内容だった。1972年の日中国交正常化前後、日中両国は互いに友好に努めてきたが、政治的な問題から再び友好が悪化してしまった。そして今では政治的な問題よりも先に国民性の問題が取り上げられてしまっている。私自身もネットを使う中で正直に言うと中国人が怖いという感想を持った。そのため、実際そのような情報の真偽はどうなのか、また中国人と会話をしてみたい、中国の若者は日本をどのように思っているのか、などの疑問を解決したいという目的を持った上で参加をしたのである。

中国に着いて早々、まず一つ感じたことは空港内やホテルなどの施設からいい香りがすること、そして広いということだ。勝手なイメージではあるが、中国は世界の工場とも呼ばれているから工業廃棄物が大量にあり、街が汚いのではないだろうかと思い込んでいた。しかし、実際は街中にゴミ箱の設置がされていたり、広大な土地に新しく綺麗な建物がたくさん並んでいたりと思惑とはかなり違っていた。最初に訪れた廊坊市は道路が綺麗に整備されていて写真映えするような像や木、花が植えられており手の行き届いたまちづくりに正直驚いた。

また、七日間過ごしていく上で更に気づいたことが二つある。

一つ目は中国人の性格性は、暖かく優しい人が多いということだ。壮大な人口を抱えている中国人の性格を一概にそうだとは言えないかもしれないが、実際に七日間、色々な施設や中華料理屋さんに訪れて出会った中国人の方々は我々日本人を毛嫌いするどころかむしろ暖かく迎え入れてくれた。レジで支払い方法に手間取ってしまったときも、お店のお姉さんは優しく微笑んで一緒に解決方法を探してくれたし、言葉が上手く通じないときも、積極的に何かを伝えようとしてくれるし、私たちの伝えたいことを何とかして読み取ろうとしてくれる。そして、北京外国語大学の方と交流したときに感じたことはなによりとてもフレンドリーだということだ。総じて私は、中国人は愛嬌があり素敵だと思う。

二つ目は、中国の技術は素晴らしいということである。産業的な視点で、中国の建築技術は凄いけど欠陥が多々見られる、中国製品は凄いけど体に悪い素材を使ってる、日本のパクリがある、などという意見がある。そんな中私が今回訪れた CVTE という企業訪問では、中国の技術は確かに最先端を進んでいた。教育の場までも監視されており、このテクノロジーを利用すれば不自由のない暮らしができる想像ができた。しかし私は、いつどこでどんな時も監視されているという恐怖と息苦しさを感じたし、テクノロジーのこれ以上の進化は人間が共存する利便性のある社会からの後退が少し見られる未来を感じた。

私はこの七日間で沢山の情報を得たし、沢山交流をしたし、沢山の刺激を受けた。実際に自分の足で中国を訪れ、自分の目で見た中国を私は忘れないし価値観を大きく変えることができた。そして新しく気になることが増えた。それは政治的な側面から見る日中間である。どうしてここまでも日本には中国に対してマイナスな情報しか入ってこないのか、マスメディアの過剰な情報操作は一体なぜなのか、政治面や経済的な面から見て分析したい。今回の訪中団での経験は間違いなく、私を成長させてくれる糧をくれた。それを無駄にしないように今後は活動していきたい。そして随行の皆様、現地のガイドをして下さった皆様、百名規模の私たちを迎え入れてくれた施設の皆様、この大学生訪中団に関わっている全ての皆様に感謝申し上げたい。ありがとうございました。

「等身大の中国をみつめて」

3-A 東海大学 高橋結南

【はじめに】

私達は今回の訪中国で河北省と北京の2都市を訪問した。私は訪中前に一度中国を旅行した経験があり、その際に中国に対して良い印象を持つようになった。そのため、今回訪中国でしかできない経験を通して、さらに中国への理解を深めたいという思いを胸に活動に参加した。

【印象的だったイベントや学び】

私が今回の活動で印象的だったイベントは2つある。

1つ目は新绎美術館で紅樓夢の劇やパフォーマンスを拝観したことだ。その中で、私が特に印象的だったのは後半の紅樓夢をテーマにしたパフォーマンスである。会場は暗く円型で一面を観客席で囲われており、その上半分の壁には中国語がずらりと並んでいた。パフォーマンスは昔と現代を行き来し、照明や小道具、映像を駆使しながら制作されていたため、作品についてよく知らず、中国語が堪能でない私でも構成を理解し、楽しむことができた。また、このパフォーマンスは私にとって紅樓夢や中国文学に興味を持つきっかけになった。再度この場所を訪れる機会があれば、紅樓夢の物語内容をおおまかに理解し、中国語能力を向上させた上で訪れたいと考えた。

2つ目は北京大学で開催された世界青年和平大会である。このイベントは140の国と地域から約3000人ものが集い、各国の文化を披露することを通じて交流することで世界平和への意識を深めるものである。私がこのイベントで特に印象的だったことは習近平国家主席が述べた世界平和における各国青年との団結の重要性である。ニュースを見ると、政治的理由などから国家間に亀裂や緊張が走っている状況をよく目にする。しかしそのような状況下だからこそ、未来を担う私達が相手を尊重する心を持つことで平和に一步步近づいていくのではないだろうかと考えた。

大会の第2部では各国のパフォーマンスが行われ、日本からは創価大学が参加し合唱「桜花縁」が披露された。フルートが奏でる繊細で優しい音色に真っすぐに豊かなコーラスが会場に響いていて、その時ふと自身の故郷を思い出し感慨深い気持ちになった。その他にも中国、オーストラリア、ロシア、西アフリカなど国ごとの文化を五感で体感し、私にとっても貴重な体験となった。

【さいごに】

私は今回の2025年日中友好大学生訪中国を通じて、普通の旅行では出来ないような体験ができた。そして、このような経験ができたのは訪中国に携わってくださった全ての方々のお陰であり、ここに改めて感謝の意を表したい。自然災害の影響で急遽予定していた訪問先がキャンセルになったにも関わらず、迅速に対応してくださった日中友好協会や中国側の

皆様、ガイドの範さん、バス運転手の石さん、ホテルや施設先で出会った現地の方々、誰かひとりでも欠けていれば訪中団を完全に遂行することは決してできなかった。一期一会の出会いではあるが、私はこれからもこの出会いを大切にしたい。そして、ガイドの範さんが「袖振り合うのも多少の縁、地球のどこかでまたお会いしましょう。」とおっしゃっていたような関係性で、中国人や世界の人々と付き合っていこうと思う。

「共に未来をつくる」ために―中国で感じた世代と国境を超えたつながり―

3-A 法政大学 高谷 春菜

今回の訪中国を通して、「百聞は一見にしかず」という言葉の重みを実感した。団長がたびたびスピーチの中で引用されていた言葉だが、中国という国の歴史的・文化的な側面を実際に目で見て、耳で聞き、人と話すことで、断片的だった知識がリアリティを持って立ち上がってきた。また、普段の大学生活とは異なり、学問分野や関心、年代がさまざまな人々と出会えたことで、日常的にも多様な視点に触れることができ、自分の価値観や考え方に大きな影響を与える経験となった。

廊坊師範学院では、中国の教育に対する熱意を強く感じた。中国の教育熱や大学受験の厳しさは以前から知っていたが、その教育体制がどのように形成されてきたかについて展示を通して学び印象に残った。儒学の展示を交え、歴史に名を残す教育関係者を丁寧に紹介する姿勢には、教育を国家の柱と捉え、後世に残そうとする意志を感じた。その後、北京外国語大学の学生たちとの交流では、学生の真剣なまなざしや、整備された学習環境、熱意ある教員の姿から、「未来をつくる若者を育てる」という意志が伝わってきた。

「様々な国に訪れる事が夢だ」と語る私に対し、「それは理想すぎて現実味がない」と話す学生の反応は、社会の制度や価値観の違いを象徴するようで印象的だった。国の制度や社会構造の違いが、若者の夢や進路選択にも影響を与えていることを実感した瞬間だった。

北京滞在中には CCTV や CVTE といったメディア・テクノロジー関連施設も訪問した。そこで感じたのは、中国の科学技術の進歩の速さと、それを社会に活かそうとする積極的な姿勢である。特に教育現場では、日本の電子黒板よりはるかに進化した AI 搭載のインタラクティブホワイトボードが導入されており、非常に興味深かった。また、テレビの液晶パネル技術が企業会議や医療現場などさまざまな場面で応用されていることにも驚いた。会議の内容を音声記録し QR で共有するなど、想像していた「未来」がすでに現在として存在していることを体感した。技術の発展を支える国民の受容性と、国家の大規模な投資には圧倒された。

食文化にも多くの発見があった。北京で食べた山西料理は、香辛料の使い方や食材の多様性に地域性と歴史を感じさせるものであった。また、日本の中国料理店でよく見る工芸茶が、今の中国では日常的に飲まれるものではなくなっているということも興味深かった。さらに「蝦夷錦（えぞにしき）」という織物がかつて中国から日本に伝わったという話を聞き、豊臣・徳川の時代に遡る文化交流の歴史に触れ、日本文化の中にも中国起源のものが多くいることを改めて認識した。

一方で、社会主義国でありながら、都市と郊外での格差も見えた。高層ビルが立ち並ぶ都市部に対し、郊外にはまだ開発途上の地域も多く、これは伝統文化を守りつつも他国の良い点を柔軟に取り入れ、急速に近代化を進める中国の姿勢の結果とも言える。ガイドさ

んが例に挙げたレンタルサイクルサービスのように、一気に流行し、淘汰されながら「本物」だけが残っていく姿には、今後のさらなる発展の勢いを感じた。

帰国前日には国際青年大会に参加し、中国と深い歴史交流を持つ国々の学生たちが集まる中で、中国のトップ層が語るビジョンや、各国から見た中国像に触れた。「平和な未来を築くには若者の協力が必要だ」というメッセージが繰り返し語られており、SDGs、テクノロジー・ガバナンス、グローバルガバナンスといったテーマにおいて、国境を越えた若者の連携の重要性が強調されていた。

「平和は自動的に訪れるものではなく、選択と行動の積み重ねによって築かれる」。この言葉は、中国の抗日戦争、アンネ・フランクの日記、そしてガザの現状などとともに語られた重要なメッセージである。中国、カンボジア、日本、それぞれ異なる背景を持つ若者たちが、互いの違いを理解し、未来をともに築く「アクションテイカー」として責任を果たすべきだと感じた。

また、大会中に出会った中国の学生から後日「你们勇敢的一步 促进中日友好交流（あなたたちの勇気ある一步が日中友好を促進する）」というメッセージをもらい、自分の行動が未来の友好関係に繋がることを強く実感した。偏見を持たず、フラットな視点で他者を理解しようとする姿勢の大切さを改めて認識し継続していこうと思った。

今回の訪中を通じて、私は「国家」という枠組みだけでは見えてこない多様な現実と向き合い、歴史や文化、技術、そして人と人との対話の力を全身で学んだ。

歴史とは過去の記録ではなく、今をかたちづくり、未来を照らす光である。そして、その未来を担うのは、まさに私たち若者だ。国境や価値観の違いを超えて理解し合い、「和をもって共に生きる」世界を築いていく責任と希望を、この旅を通じて確かに胸に刻んだ。

「異郷に触れて見えたもの―伝統と革新の狭間で」

3・A 國學院大學 田中瑠璃

今回、私は中国古典文学を専攻する学生として、大学の派遣による訪中団の一員として中国を訪れる機会を得た。専攻分野である「詞」という文学ジャンルを足がかりに、現代の中国において古典文化がどのように息づいているのか、またそれが日本にどのように伝えられているのかについて、現地で肌で感じたいという思いを胸に、7日間の行程に臨んだ。

中でも特に印象に残っているのは、4日目に訪れた共産党記念館で目にした毛沢東の詞『念奴嬌』である。「念奴嬌」とは詞の形式の一つで、その詞牌は唐代・玄宗の時代に実在した歌妓「念奴」の名に由来し、「嬌」は艶やかな女性の美しさを表す語だ。毛沢東がこのような伝統的な詞牌を用い、自らの思想や風景描写を詠じていたことに、驚きと深い感銘を受けた。

実は、私にとってそれは単なる展示以上の意味を持っていた。というのも、私は大学で「詞」の歴史的変遷や表現技法について日々研究しており、その詞牌を異国の地で目にした瞬間、古典と現代、理論と現実、学問と生活が一つにつながるような感覚を覚えたからだ。まさに、紙の上で学んでいた知識が、現実の世界の中で躍動している姿に出会った瞬間だった。この体験は、古典文学の研究が決して過去の文化を閉じた世界で眺めるだけでなく、今を生きる人々とのつながりの中で新たな意味を持ちうることを実感させてくれた。

日にちは前後するが、3日目に訪れた国家大劇院芸術館で開催されていた「巴山蜀水楽飛揚―川渝地区楽舞文物精品展」でも、私の関心と深く結びつく展示に出会った。この展覧会は四川地方に伝わる伝統音楽や舞踊、文物を紹介するものだったが、その中に宋代の詞に関係する貴重な品が含まれていたのだ。特に心を惹かれたのは、「採桑子」という詞牌に基づいて作られた石画だった。宋代において広く用いられたこの詞牌は、「念奴嬌」と同様に、私の研究対象の一つである。石に刻まれた繊細な装飾を目にしたとき、詞が単なる言葉として存在していたのではなく、視覚芸術や生活文化の一部として深く人々の暮らしに根ざしていたのだということが、視覚的に理解できた。

今回の訪中を通じて、私の中にあった中国へのイメージは大きく変化した。訪中前の私は、古典文学を通じて中国に親しみを感じていたものの、現代の中国社会がそれをどのように継承しているのかについて、どこか漠然とした距離感を抱いていた。だが、現地で実際に文化施設を訪れ、現代中国の若者や案内の方々々と直接言葉を交わす中で、伝統に対する彼らの誇りや、過去と現在をつなげて未来へと伝えようとする姿勢にふれ、考えを改めざるを得なかった。古典の価値は失われているどころか、むしろ新しいかたちで息を吹き

返している。伝統と現代が、対立するものではなく、相補いながら共存している。そのような印象を受けたのである。

また、文化というものが国家の枠を超えて人と人をつなぐ力を持っていることも、改めて強く実感した。日本と中国は歴史的に複雑な関係を有しており、メディアなどを通じて互いの国民感情の隔たりが報じられることも少なくない。しかし、今回実際に中国の人々と接してみて、そこにあったのは一学生に対するあたたかな好奇心や敬意、そして文化を分かち合おうとする姿勢だった。私自身も、古典文学という共通の文化的土台があるからこそ、言語や国境を越えて対話が成り立ちうることを体験的に理解できた。

今後、日本と中国という隣国同士がどのように向き合っていくべきかを考えるとき、まずは互いの文化や歴史への敬意を持ち続けることが何よりも大切だと感じる。そのためにも、政治や経済の話題に限らず、人と人との草の根の交流や、文化を介した対話の場がますます求められるだろう。そして自分自身は、学術という立場から、両国の文化的接点を見つめ、伝えていく役割を果たしていきたいと思う。

この7日間の旅は、単なる一つの研修を超えた、自分自身の人生や研究への姿勢を見つめ直す機会となった。異国の地で出会った詞のかたち、そこで暮らす人々のまなざし、そして文化に対する真摯な姿勢、そのすべてが、私にとってはかけがえのない学びとなった。この体験を今後どのように言葉にし、行動に移していくかが、私の次なる課題であると感じている。

「『知』の深化～日中関係と国際社会への貢献に向けて～」

3-A 一橋大学国際・公共政策大学院 谷川瑞華

今回の訪中でまず初めに感じたことは中国の広大さである。広い国土に世界で 2 番目に多い 14 億 2520 万人を擁するその圧倒的な広さと多さに驚いた。移動中には、道路の広さや交通量の多さから経済力の高さと人口の多さ、天壇公園では中国の歴史の深さ、食事からは文化の多様性と自然の豊かさを実感することができた。

たくさんの経験をさせていただいた中で特に印象深かった訪問先は二つある。一つ目は共産党歴史展覧館である。大学院で国際政治学を専攻しているため、共産党が歴史をどのように語っているのか、訪問する以前から大変興味を持っていた。展覧館では、共産党がどのようにして中国を統一してきたのか、自らをどのように位置付けているのか展示されており、大変勉強になった。歴史とは自らを正当化するために使われるものであり、誰がどのような目的で歴史を利用するのかで語られ方が違う。中国は漢族が多数を占めているが、55 の少数民族も存在し、国家を構成している。そのため、巨大な国家を統一するにはしっかりと歴史が必要である。加えて、バスガイドの方の話で印象深かったのは「中国には 14 億人もの人が住み、それを統治するには権威主義になっても仕方がない」ということである。私は日本に生まれ、民主主義が当然という状態で育ってきた。権威主義の国に住んでいる人たちは、その政治体制についてどう思っているのか気になっていたが、ある程度理解があるのではないかと思った。ただし、それは少数民族からしたら、そう思わないことも当然想定されるため、人によって政治体制について考え方が違うと学んだ。このようなことを展覧館において歴史を学び、人と触れ合うことで歴史と政治体制が切り離せないことを学んだ。二つ目は北京大学で開催された世界青年和平大会である。この大会には世界中から青年が参加していた。アフリカ諸国や島嶼国からの参加もあり、中国の外交がどのように展開されているのか、実際に体験できた機会であった。習近平主席の言葉の代読から始まり、中国が平和をどのように理解し、それを青年に向けてどう実践していくのか理解できた、必ずしも中国が思う平和と、G7 などの西側諸国が思う平和とそれに向けた手段が一致するわけではないことを認識できた。しかし、このことを認識できたことでも平和と協調への一歩であり、互いを理解しなければ平和は実現しない。

私が今回の訪中で見たのは、人口、国土、経済、歴史、政治などの一部にすぎない。しかし、訪中した 7 日間で自らの目で中国を見て、知識に深みを加えることができた。今後はそれを公益のために還元していきたい。将来、私は公務員として自身の専門分野である安全保障の面から世界の平和のために貢献することを望んでいる。この機会で学んだ様々なことは、これからの日中関係、そして世界のために常に多様な人や考え方に接しながら国際公共のためにできることを探し続け、貢献できる人材になるための一歩となったことは明確である。

最後に、このような機会に参加できたこと、訪問先で多くの人が暖かく出迎えてくださっ

たことに感謝申し上げます。また、自然災害の影響で変更も多かった中、訪中できたことに改めて感謝いたします。これからの日中関係と世界の平和のために、ますます貢献していきたいと決意を新たにしました。

「本当に参加してよかった」

3-A 日本大学 三浦翔

今回の訪中国で、私が印象に残っている出来事をいくつか挙げたい。

まず、初日の広州トランジット事件である。この日はほとんど移動に費やされ、何もできなかったように思えたが、私は飛行機でたまたま隣り合った NAO とマイクという人物に出会った。NAO は第 2 班の班長で、明るくノリのいい性格だが、実は真面目で責任感も強いことがわかり、すぐに打ち解けた。一方、マイクは北京出身で、広州では石油の仲介業に関わる仕事をしていたという。帰りの飛行機では、家族との団欒を楽しみにしていると話してくれた。言葉の壁はあったが、翻訳アプリや身振り手振りで十分に意思疎通ができ、3 人で和やかに盛り上がることができた。移動しかない一日かと思っていたが、この出会いによって早くも「ワクワク」が始まった。しかしその一方で、「もっと話せたら」というもどかしさも感じ、中国語を学びたいという思いが強く芽生えた。

次に記憶に残っているのが、博物館での迷子事件である。自分の不注意で一人になってしまい、不安と焦りで胸がいっぱいになった。しかし、探しに来てくれた二人の訪中国の先生が、落ち込んで走る私に向かって「没事儿（だいじょうぶ）」と何度も声をかけてくれた。また、バスの運転手さんも同じように優しく言葉をかけてくれ、その一言に非常に救われた。自分の軽率さを深く反省すると同時に、言葉を越えた優しさに触れることができ、忘れられない出来事となった。

共産党博物館の見学については、正直、日本人の自分が訪れていいのだろうかという迷いがあった。しかし、現地で展示や映像を見ながら、「他国の視点から語られる歴史を知らなければ、国際理解も前に進まない」という思いを強くした。特に印象的だったのは、訪中国の日本人学生が真剣に戦争の記録映像を見ていたのに対し、中国人学生がその映像を最初から最後まで撮影していたことだ。戦争の記憶の継承の仕方は国によって異なるが、どの国も自国の歴史を伝えるために記録を巧みに活用していると感じた。

また、青年大会では中国と他国とのつながりや協力関係について知ることができ、大変勉強になった。日本国内では中国に対する否定的な報道が多いが、実際には近年まで非常に友好的な関係を築いてきたことを知り、歴史や国際関係の捉え方が大きく変わった。これからの時代を生きるうえで、偏見や一面的な情報に流されず、自分の目で見て考えることの大切さを改めて学んだ。夜になると、他の団員たちはこうしたテーマについて夜な夜な熱く語り合っており、その知識量と意識の高さに圧倒された。自分ももっと視野を広げ、学び続けなければならないと強く感じた。

訪中団で私にとって最も価値があったのは、他の団員と出会えたことである。皆それぞれが高い志を持ち、知識を深め、行動に移している姿を見て、自分も負けていけないという気持ちになった。近い世代の仲間たちがここまで考え、努力し、力をつけていることに大きな刺激を受け、自分の進むべき道を見つめ直すきっかけとなった。

この訪中団は、間違いなく私の人生に新しい歯車を回してくれた。最後に、日中友好協会の皆様、中国政府の皆様、そしてさまざまな形で支援してくださった方々に心から感謝を申し上げたい。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。